

PIHS 助産所で、コミュニティー・ヘルス組合で、母と子の命を守る活動が続けられています

活動は順調 しかし収支は・・・

上半期の事業評価のため、PIHSに依頼した報告が9月下旬に届きました。数字面での実績は、出産49名、妊婦検診251名、家族計画指導19名（1-9月）でした。

出産介助のほか、妊婦検診や家族計画指導など、助産所が目指す「母と子の命を守る」活動は順調ですが、収支面は、特に8、9月は医療保険からの払い戻し収入がゼロだったことが分かりました。

医療保険適用には、2名のプロバイダー配備が必須要件ですが、7月末に契約が切れたサルバシオンさんの代わりになくて、助産所は一時的に保険適用外になってしまいました。すでに、医療保険からの収入は運営費の45%を賄うほどになっていて、プロバイダー欠員が長引くと助産所の機能が果たせなくなります。幸い、前号で報告のように、ナプサさんもプロバイダー資格に挑戦し、その研修費をJOFPA基金で支援しました。保険当局への登録手続きが終われば保険払い戻しは再開されます。

今はまだ55%を占める当団体の支援も、妊産婦の保険加入が進めばその比率を徐々に減らせます。今しばらく資金面で支え見守っていきたいと思います。



助産師でプロバイダーのサラリンさん(左)と、看護師でプロバイダー資格取得中のナプサさん

妊産婦対象の医療保険加入推進プロジェクト

PIHS は各コミュニティーで育成してきた保健ボランティアを通じて、7月の栄養月間に実施される給食や栄養研修の機会を利用し、参加した妊婦に医療保険に入っているかなどの予備調査を始めました。

助産所事業が始まって以降、PIHS スタッフのコミュニティー活動に割ける時間は少なくなりましたが、その分各地区のボランティアが頑張っています。

9月14日には、ジェジョン講師による母子の健康及び医療保険の重要性に関する研修が実施されました。

プロジェクトが目指す保険加入者の増加までには、これからも地道なコミュニティー活動が必要ですが、妊婦に対する当初保険料3か月補助分を予算に含めていて、成果に期待しています。

(NPO 法人WE21 ジャパンみどり助成事業)



ジェジョン講師による妊産婦対象の医療保険を中心とするセミナーには、カワス、パリンバン、ツヤン、キアンバなど各地区から多数が参加した。



7年前と5年前の支援事業のその後（評価活動報告）

(三井物産環境基金及び緑の募金助成事業地域)

過去25件のアグロフォレストリー事業評価について、担当のニックさん（PFP 農業専門家）から、7月と9月末にモニターした地域のうち、2地区の詳細が届きました。

2012年実施のキナマンガンではゴム樹液販売で平均月2000ペ（米40kg代相当）の収入を得ています。また、2013年実施地区（ラムカニダン・写真）は、等高線状に植えたゴムノキが5mに成長しているものの、樹液の採取・販売は1年ほど先になります。しかし、ゴムの樹間にはバナナやトマトの栽培が行なわれていて、山腹斜面は緑に覆われ、かつてのような雨期の激しい土壌浸食はなくなりました。



2013年 整地作業中



2019年 5mに育ったゴムノキ

ボルールのモデル農場事業

先住民族による組織化事例としての期待も

山岳部のボルールで、傾斜地農法の普及を目指すモデル農場事業は、26名からなる住民組織Tud Bolul Association / TBAを結成、2019年2月11日付で政府機関・労働雇用省/DOLEに登録するとともに、6月には、コ罗纳ダル市の住民組合認証も受けて、子豚6匹が配布されました。

組合長ロレンシオ、技術指導ボニファシオを中心に、住民たちは畑仕事の合間に、理念・実技研修に参加しています。

(関連記事P1)



等高線状に苗を植える 傾斜地農法の実習



TBAの主なメンバー 農業指導者ボニファシオ(右端) 代表ロレンシオ(前列左から2人目)